1.　序

重　松　俊　明

目　次

1. 1. 研究の目的
1. 2. 研究の方法と体制
1. 3. 報告書作成までの研究経過

1. 1. 研究の目的

各大学や高校が，本来めざす研究及び教育上の目的に照して，予め，入学者を各学校の課程を履修するに適したもの，少くともその見込みあるものに限定するため，選抜を行うことは当然の必要である。また，大学及び高校への進学志望者が，その収容可能数を上まわるとき，そこに各人の志と能力を平等に尊重するたてまえから，公平な選抜を行うことが要請される。しかし，わが国の入学競争の現況は，すでに世界の文明諸国には類を見ない深刻な様相を呈しており，たとえば高校，中学校における試験準備のための補習授業の一般化やそれに伴う正規カリキュラムの変更，上級学校入学目当ての越境入学，浪人の激増，果ては試験の不安や失敗を原因とする家出や自殺といった憂うべき諸現象を生み出している。

こうして，本来，人間形成の一手段であるべき「教育機関への入学」のための準備が，教育目的そのものから離反して，その達成を危地におとしいれている疑いが濃い。それとともに，現在，わが国で行われている入学試験制度が，公平な能力を選抜する制度として適当かどうかにも，疑いがある。そうして，このような疑点を追求して問題を解決に導くためには，何よりも現行の入試制度への適応過程として生起する諸種の問題とその原因とができるかぎり実証的に研究され明かにされねばならない。こういう問題意識をもって，われわれは本研究を行ったのである。

ただ，上にのべた入学試験制度及び入学競争に関する問題点の中，選抜方法の適否を検討する側面は，このほど石山修平・小保内虎夫氏等を始めとする東京教育大学の研究陣によって，詳細な研究報告が刊行された。そのため京都大学教育学部では，重複をさけて，この側面のみは省くこととし，残余の問題点に関する綜合研究を行うため，昭和31年度の文部省科学研究費「綜合研究の部」に申請，同年度より継続2年間にわたって，総額81万円の研究費を交付された。ここに，2年間の研究成果の大部分を，「教育学部紀要」の特集として発表する次第である。

1. 2. 研究の方法と体制

われわれは，研究領域を，(1) わが国における入学試験制度の沿革と現況 (2) 進学及び入学競争の現状，(3) 入学試験に対する受験生・学校・保護者等の適応態勢と問題点，(4) 入学競争を規定し，促進する社会的条件という四つに大別し，これら各研究領域について，それぞれ3～4名の分担研究班を組織した。ただこの中，(3)の適応態勢に関する研究については，さらに中学生・中学校を対象とする班，高校生・高校を対象とする班，及び予備校と中学・高校のＰＴＡを対象とする班に細分したため，研究班の数は6班である。当初の各研究班における人的構成及び主だった研究課題は次のとおりであった。

第1班　班員：高坂正顕・相良惟一・池田進・小倉親雄

主要テーマ：わが国における入学試験制度の沿革と現況

1. わが国における入学試験制度の沿革
2. 入学試験制度の現況
3. 各国入学者選抜制度の研究
4. 入学者選抜制度に関する文献目録の作成

第2班　班員：苧阪良二・渡辺洋二・竹内義夫

主要テーマ：入学競争の現況

1. 入学難に関する全国的基礎資料の作成
   a 入学率
   b 入学者における高校卒業年次別構成
2. 入学難の地域的偏差
3. 入学率・進学適性検査成績・入学者中浪人率間の相関関係
4. 志願者入学率と「大学所在地と学生の家族居住地間における距離の分布状態」との相関

第3班　班員：片岡仁志・鰺坂二夫・小田武

主要テーマ：高校入試に対する中学生及び中学校の適応体勢

1. 中学生の進学と就職に関する調査研究
2. 補習授業の現況

第4班　班員：下程勇吉・正木正・高瀬常男・笠尾雅美

主要テーマ：大学入試に対する高校生及び高校の適応体勢

1. 高校三年生の受験生活に関する実態調査
2. 大学合格者を対象とする受験生活時代の調査研究
3. 高校における補習授業の実態

第5班　班員：倉石精一・梅本堯夫・安原宏

主要テーマ：大学入試に対する予備校生徒の適応体勢及び入学試験に対する保護者の態度

1. 予備校生徒の生活実態調査
2. 受験神経症の調査研究
3. 入学試験に対する保護者の意見

第6班　班員：重松俊明・永井道雄・森口兼二・遠山順一

主要テーマ：入学競争の社会的条件

1. 進学志望者と学校収容能力間の数量関係に関する基本的研究
2. 学歴の意味に関する社会史的背景
3. 現代日本における学校差の現況と学歴の意味

われわれは，上記のような班組織に分れて分担研究を進める一方で，相互に各班の研究成果やその進渉状況を知り合い，綜合研究の実を失わないために，月1回全体会議を，ひらくほか，隔週水曜日に各班選出の委員によって構成する連絡委員会をひらいた。全体会議及び連絡委員会議の構成は次のとおりである。

(1) 全体会議　議長　重松俊明　参加者全員

(2) 連絡委員会議　委員長　森口兼二

委員　第1班　小倉親雄
　　第2班　渡辺洋二
　　第3班　小田　武
　　第4班　高瀬常男
　　第5班　梅本堯夫
　　第6班　永井道雄

1. 3. 報告書作成までの研究経過

われわれは上記のような体制の下に，研究を続けてきたが，研究の進むにしたがい，その成果を学会や学会誌等を通じて中間的に発表し，その都度，数多くの貴重な批判に接することができた。これら中間報告の中，主だったものは次のとおりである。

1. 発表期日：昭和31年5月4日
   機関名：日本教育学会（於東京学芸大学）
   発表者及び題目：(1) 倉石精一「教育心

理学の観点よりみた入学試験の諸問題」
(2) 森口兼二「教育社会学の観点よりみた入学試験の諸問題」

2. 発表期日：昭和31年10月20日
機関名：教育社会学研究第10集
発表者及び題目：森口兼二「入学試験の現況とその社会学的分析」

3. 発表期日：昭和31年10月21日
機関名：日本教育社会学会（於東北大学）
発表者及び題目：森口兼二「入学競争と学校差の問題」

4. 発表期日：昭和32年5月3・4・5日
機関名：日本教育学会（於名古屋大学）
発表者及び題目：(1)重松俊明「学校間の連絡と入学試験制度」 (2)梅本堯夫「受験神経症傾向の分析」 (3)森口兼二「入学競争を規定し促進する社会的条件について」 (4)倉石精一「入学競争に対する適応態勢について」 (5)下程勇吉「"入学試験に関する研究"の総括」

われわれは，これらの機会に得た批判・助言や各方面から出された同種の問題に関する諸資料に照して，各分担研究課題ごとに，従来，すでに相当の成果が世に問われ，われわれの行いつつある研究が新につけ加えるべきものをもたない部分は整理することとし，限られた労力や費用を，比較的なお明かにされてない部分の研究に重点的に配分するよう心がけた。このため，当初予定していた研究計画は多少修正され，主だった研究成果は，以下，本紀要に掲載するとおりの体裁をとったのである。つぎにわれわれが修正した諸点と，その理由の説明を兼ねて，所収の諸論文の重点と論文相互間の連関性を要約しておきたい。

まず，冒頭の「日本の入学試験制度の沿革は，第1班の課題中の前段に関するもので池田進教授の手になったものである。池田教授は，同論文で，大宝令における秀才進士の試や延喜式にまでさかのぼり，徳川期を通覧して，明治から戦前に及んでいるが，事柄の性質上その重点が明治以後の学校制度確立以後にあてられていることは云うまでもない。本論文は，広い意味での入学試験制度を，学校の存するところに必然的に生じるものと見る立場から，それが，それぞれの歴史的状況下にあって，どのような変化を重ねつつ今日に至ったかを詳述している。この論文によって，今日論議されている入学試験制度上の諸問題がどのような先史をもち，その先史において，すでにどれほどの度重なる検討に委ねられたかを知ることができよう。

これをうけた第2論文は，第1班の課題中，入学試験制度の現況に関するもので相良唯一教授が研究・執筆した。戦前までの学校制度は敗戦と占領によって根本的に改革せられ，これに伴って入学者選抜方式も，当然この新しい教育制度に応じた形式が工夫されることになった。戦後の入学試験制度も，すでに幾度かの変遷を見てはいるが，この間の事情や，選抜方式そのものの検討は，すでにふれた小保内・石山両氏編「大学入試方法の検討」にくわしい。従って，相良教授は専ら現行入学試験制度に関する法規的根拠の論述を中心としている。なお，第1班は，当初の計画において，比較の目的上，諸外国の選抜制度おも研究することになっていたが，これは問題の性質上，第1班の課題と限定しない方が適当であると考え，全員関心をもって海外事情の蒐集につとめた。ただ紀要における発表形式としては，分量の問題もあり，世界諸国の例を個別的に取り上げるとき，却って比較の目的に適しないことを考えて，英・米・独・仏等の事情に明るい数名のシムポジアムの形式をとり，これを本特集の末尾におさめることにした。なお第1班小倉助教授の担当した入学選抜制度文献目録は，同助教授が研究半ばで外遊したため掲載できなかった。

第3論文は，入学競争の現況に関するものであり，第2班の研究課題に関する総括的なまとめである。同論文の主目的は，あくまでも，入学難の全国的な現況を正確に把握することにか

かっているが，この目的を達成する前提として，一般に入学難の名で呼ばれている事象の意味内容が決して一義的に明確ではないことに注意を向け，同論文は，この点の検討をもって始まっている。ついで主題とする入学難の全国的概況については，従来，しばしば見逃されてきた虚偽の算出法を検討しつつ，できるかぎり正確な数値の算出に努力が向けられている。さらに入学難における地域的偏差，いいかえれば都市集中傾向を実証し，最後に入学難の大学別・学別部及び系統別の偏差に及んでいる。そうして，この最後の部分の資料が国立大学に関するものに限られているのも，正確を期したために他ならない。なお同論文は，入学難に関する今後の見通しにも，一つのメドを与えてくれるであろう。第3論文における本文の執筆は渡辺洋二助教授が担当したが，この論文において極めて重要な位置を占めている各種の統計資料の作成は主に竹内義夫助手の努力によるものであり，論文作成は研究半ばで渡英し1957年12月帰学した，苧阪良二助教授を交た検討の結果なったものである。

第2，第3論文のあとをうけて，それらで明らかにされた今の入学試験制度と入学競争というものに対して，中学・高校なり，受験生なり，その保護者たちが，現にとっている適応体勢を扱ったのが第4・第5論文である。この中，第4論文は第3班の研究報告であり，同じ適応体勢でも中学生を中心にしている。この領域に関しては，すでに日本教職員組合の教研集会において数々の資料が出されており，その要約は日本教職員組合編「日本の教育」の各集におさめられている。そこで第3班は，できるかぎりインテンシブに中学3年生の生活そのものを調べ，義務教育の場面における受験準備のための，生活上・心理上の「ひずみ」といったものを明かにしようとつとめた。そのため，対象は比較的小さな範囲にかぎり，調査を行ったのは京都府・兵庫県・広島県の中学校16校である。本報告におけるまとめ方としては，地域・学区制・性別といった諸点を基本的な足場としている。この中，小学区地域と中学区地域の比較には，夾雑的要素の介入を排除する意図から，京都市内3校と神戸市内3校のみをつき合わせ，検討を重ねた。ここでは，性による高校入試への緊張度の相異なども，いままで気付かれなかった成果として注目されよう。執筆者は小田武助教授である。なお同班では，京都市内の中学校の教諭の方々を招いて，補習授業に関する研究座談会をひらき，この問題を追求したが，種々の事情で，ここには割愛せねばならなかった。

第5論文は，適応態勢の中，高校と予備校及び受験生の保護者に関する研究成果をまとめたものである。すでにのべたように，研究組織としては，高校生研究班と予備校や保護者を対象とする班に分れていたが，同じ大学入試を目指す高校生と予備校生の態度は，相互に比較することにおいて，一層その意義をもつことになると考え，報告においては，一緒にしてとり上げた。同論文では，まず，高校及び予備校生の大学入試に対する一般的な態度の把握に始まり，志望校選択にあずかる主要動機の検討をこころみている。ついで，既に首尾よく入試にパスした大学生を調査対象として彼等が，受験準備時代をいかに評価するかの問題を中心に，いわば青年の側における，受験生活の意味づけ方を問うた。なお，第5班の課題の一つは，入試に対する保護者の適応態度の問題であつたが，この点については，現行入試制度に対する保護者の批判を中心に，保護者の立場からする改善案の方向が追求されている。ここで，保護者の所属階層により改善意見に類型性の発見されている点，今後の改善を考える場合の一つの示唆となろう。最後に，附された受験神経症の研究は，いわば入学競争への適応過程に伴い勝ちな精神状態の検討であり，当初より第5班の多分に独立的な重要問題として研究されてきたものである。第5論文の最終的な統合・執筆は倉石精一教授が担当した。なおこの論文に関係するもの

として，森口兼二助教授は，班活動とは別に全国高校における補習授業の状態を明かにするため，任意抽出で 400の高校の進学係の先生を対象とする郵送調査を行ったが，回収率が50％にすぎなかったため，その信頼性の低さを考えて詳細な発表は見合わせた。しかし回答を頂いた，全国 202の高校の中，96％が補習授業を行っており，その三分の一は，一年生の一学期から行っているというおどろくべき結果だけを，ここに紹介しておきたい。

第6論文は，上記第3～5論文に明かにされているような激しい日本の入学競争について，それを規定し促進している社会的条件の究明な目的とするもので，第6班の分担課題に関する研究成果の総括である。この研究班では，このテーマを学部教育社会学部門の共同セミナーとして取上げた為，研究には多数の学生が参加貢献している。ところで論文では，まず第3論文「入学競争の現況」に明かにされている入学難の数量関係を解釈するための基本的立場について諸外国の事情と比較しながら検討し，社会的条件に対する問の立て方を明確にした。ついで，現代みられる入学競争の遠因ともいうべき明治以後から戦前までの，日本に特異な社会史的背景を問い，最後に，現代の入学競争の根本的原因を，種々の意味における学校差の問題にしぼって，かなり詳細な調査研究の結果を紹介している。この最後の部分を支配する基本的な考え方は，いまの入学競争を，学生の質・教授陣の質・施設・予算等の面でみられる実質上の学校差への当然の対応現象とみるとともに，さらにそれを超えて，明治初年から日本社会に深く根を下ろしてきた，卒業生の社会的地位の維持と強化に関する「社会勢力上の学校差」の結果とみ，この両面における学校差の相乗的な循環性と両者をつき合わしたとき浮び出る喰いちがいを明かにしている。日本における試験地獄その他入学試験にからまる諸問題の解決や改善が，単に選抜方法上の吟味をほどこすだけでは如何ともしがたく，それはむしろ学校差の存在形態における同質的差異から専門分化的差異への変化，学閥の解消や就職場面での採用方法の改革，学歴別待遇差や職場拡大，老後の生活を安定させるための社会保障といった点にまで連る社会的地平での解決をまたねばならぬものであることを示唆するであろう。この論文中において，実質上の学校差に関する調査・執筆は永井道雄助教授が，その他の部分は，主として森口兼二助教授が担当した。なお，実質上の学校差の調査に際しては，各方面から多大の御協力を頂くとともに数々の御迷惑をおかけした。取扱いに当っては，事柄の性質上，できるかぎりの慎重を期し，学校名はすべて記号化する等の処置をした点について御諒解を得るとともに，御協力・御迷惑に対しては，深甚の謝意とお詫びを申上げたい。

なお，さきにふれたように，論文の末尾に各国入試制度の比較を目的とするシムポジアムの要約を附した。このシムポジアムは，高坂・倉石・相良・池田各教授と永井・森口両助教授が参加し，1957年11月25日に行ったものであるが，テープにおさめた内容の復原及び整理には森口助教授と大学院学生の新井英彦があたった。このシムポジアムは，比較的な観点から，わが国の試験制度，入学競争の特異性を，社会史的に明確にしている点で，諸論文にかきおとされている部分を補い，わが国の入試制度に対する反省の手がかりをより広い視野から提供しているものと云えよう。

なお，末尾ながら，文部省の齊藤寛治郎氏を始めとして，各種資料の提供，助言，激励を賜った数多くの方々に対し，心から御礼申上げて結びの言葉としたい。